



アントレプレナーシップ教育の一環で新商品の開発について話し合う神奈川県立上鶴間高校の生徒ら(7月、相模原市)

起業家精神 授業で養う

アントレプレナーシップ教育

起業家の生き方や姿勢を学ぶ「アントレプレナーシップ教育」が、各地の学校現場で浸透し始めた。身近に直面した問題について、児童生徒が自分たちで解決法を考える。新商品を企画したり、ビジネスプランを練ったりと取り組みは様々。自治体や大学なども協力し、子供たちの成長を後押ししている。

神奈川県立上鶴間高校で、会議を開いた。テーマ(相模原市)で7月、3年は女子高生にターゲットを絞った「アントレプレナーシップ」の商品展示会。女子高生が好むかわ

いらしいデザインはどんなだろう」と井坂さんが意見を出すと、別の生徒が「女性に着るのだから顔がぬれない構造を考えよう」と思ふ」と応じる。

井坂さんらのグループは昨年、東日本大震災の被災地で採れたワカメを原材料に、地元菓子店と共同開発したパイとワカメを学園祭で販売した。岡部佳文校長は「失敗を恐れず自分で考え、積極的に表現する力に身をつけてほしい」と指導の狙いを語る。

に、子供たちに起業家マインドを身につけさせようとして取り入れる教育現場が増えている。「経済産業省の石井芳明・新規事業調整官」。生徒数が7人の広島県福山市立山野中学校は、過疎を地域の課題と位置づけ、アントレプレナーシップ教育に取り組む。

千葉大と共同で開いている。子供たちは大学生のサポートを受けながら、地元企業を訪れた見学者向けの案内プランなどを作成するといった取り組みを進める。

課題を自ら解決

若者が様々な体験を通じて起業家精神を学ぶこと、直面した課題を自ら解決

対象に1株100円で株式を発行し、模擬会社を設立した。集めた資金を元手に、地元産の和紙を使ったはがきやお札を販売。柳井晃司校長は「郷土をより深く知ること、地域に貢献できる人材に育ててほしい」と期待する。

決する力を養うアントレプレナーシップ教育。2000年代以降、職場訪問やインターンといったキャリア教育の発展形として高校などで導入が始まった。東日本大震災以降は「地域の課題を解決するため

起業家精神を持った子供たちの育成を支援する自治体や大学などの動きも目立ち始めた。千葉市は今年度から、小学生にビジネスプランの立て方や会社経営の仕組みなどを教える月1回の教室を

「教員も手探り」

アントレプレナーシップ教育については、6月改訂の国の成長戦略に盛り込まれるなど政府も重視しているが、一連の取り組みはまだ緒に就いたばかり。具体的な教育法などのノウハウは確立されておらず、「教える側の教員も手探り」上鶴間高校の岡部校長」というのが現状だ。

千葉大の藤川大祐教授(教育方法学)は「伝統的に起業家精神の指導法が確立している米国と異なり、日本はこの分野では発展途上の段階。効果的な授業を進めていくうえで、新たな教育プログラムをつくるという環境づくりを急ぐ必要がある」と指摘している。

「人と働く力向上」7割

NPOの若者向けプログラム
若者向けビジネスプランコンテストなどを実施するNPO法人「アントレプレナーシップ開発センター」が、昨年度の起業家育成プログラムの参加者約500人を対象に実施したアンケートによると、以前より向上した能力として「人と働く力(チームワーク力)」を挙げた人が76%を占めた。「人を支える力」や「コミュニケーション能力」との答えは47%だった。

参加者が感じた効果で最も多く

以前より理解が深まった点については、60%が「経営理念の大切さ」と回答し、「商売の難しさ」の答えが55%で続いた。「(商品やサービスの魅力を伝えるための)プレゼンテーションの重要性や大変さを実感した」といった感想も目立っている。

同センターの原田紀久子理事長は「従来の学校教育では、他人と協力しながら行動する力の育成が不十分。起業家の姿勢を学ぶことで様々な能力を磨くことができると強調している。

▶チーム組み商品開発 ▶模擬会社で地元応援